

講演「日本の危機」

ジャーナリスト 櫻井よしこ 氏(02 07 12)

「住基ネット問題」で、片山総務相と堂々とわたりあう桜井さん、“時の権力者”に臆せず立ち向かうその姿は、まさにわが国言論界のジャンヌダルクと言っても過言ではないでしょう。今回は歴史を繙き強かったあの日本人はどこへ行ったのか。わが国の現状を分析して「日本の危機」を訴えます。GHQ7年間の占領政策に、どうも原因があるようです。示唆に富んだ名講演です。

- * 今や無数にある日本の危機・・・「これを直してくれるのは小泉純一郎！」と多くの日本人は期待した。が、「改革の果実」は、まだ見えてこない。日本全体、何が悪いのか？ お金でもない、才能でもない、時期でもない・・・たった一つの要素、それは「心」だ。後ろ向き、内向き、意気地なしになっている「心」、これが全ての原因だと思う。
- * 日本は、かつてすばらしい国であった。歴史を繙けば容易にわかる。信長、秀吉の時代は世界に冠たる貿易国家。世界の金銀の4割を握っていた。秀吉の朝鮮出兵は30万人の兵力と兵站を確保し、ムガル帝国に匹敵する軍事大国だった。江戸時代は教育重視の超文化国家であり、明治時代には小国でありながら日清、日露戦争に勝った。
- * そんな日本人がなぜ元気をなくしたか？ それは「GHQ」の占領（教育）政策に遡る。7年の占領下で、3年間NHKに放送させた「真相箱」がそれだ。「日本の過去を全面否定し、米国の価値観が如何に良いか」を連日30分も流した。それも黄金時間帯にだ。最初に腹を立てた人も次第に怒る気が萎え、多くの人は洗脳されていった。
- * 占領軍の検閲も日本の立場を擁護するものは一切排除された。「してはいけない」が30項目にも上る。「GHQ批判」「軍事裁判批判」から「大東亜共栄圏賛美」まで。日教組もGHQと同一歩調をとり、偏向教育を行う。1~2世代して本当の効果がでるところに教育の恐ろしさがある。GHQが残した呪縛が今の日本に現れているのだ。
- * 真相箱のひとつに「ルーズベルト大統領が最後の最後まで戦争回避に努力したのに、天皇はそれを無視して真珠湾攻撃を...」がある。戦争勃発の前日に大統領から親書が送られてきたのは事実。が、内容のない形だけのものだった。日本人資産の凍結と石油輸出の全面禁止を打ち出した米国は、日本を戦争に巧みに引きずりこんでいく・・・。
- * 怒り狂う軍を抑えて東郷外務大臣が「乙案」という妥協案を米国に出す。それは「日本はフランス領インドシナ（ベトナム）から手を引く」という内容。その返事がハル国務長官から届いた。内容は乙案には一切触れず「中国から手を引け」。中国との交流を望む米国は日本が邪魔だったのだ。これが有名な11月26日の「ハルノート」だ。
- * 戦争に負けて日本は激変する。その中で唯一、傷つかなかった部分がある。それは官僚制度だ。GHQはこの優秀な人々をうまく使おうと考えたわけだ。以後、法律は彼らが作る。立法府、いわば「立法議員」であるべき国会議員が、たまたま作る法律を「議員立法」と言う。数%しかない。あとの全ての法律は官僚の手によるものだ。
- * 日本は法治国家、我々は法律によって罰せられる。その法律が我々の代表である政治家ではなく、官僚の発意によって作られる。「官僚」に私は大きな問題点があると思う。昨年、道路公団の課長と財源の問題で話し合ったが、「5年後、34兆円の借金はゼロになる！」と断言する。幾つか疑問が生じた私は一週間後、彼に電話をかける。
- * 受付嬢曰く「課長は、もういません」。本庁の国土交通省へ戻ったという。私はすぐ本庁へ電話。すぐ出てきた彼曰く「私はもうそのポジションにいませんから、後任に聞いてください」。後任に電話すると「それは前任者の言ったことです」。誰も責任をとってくれないのだ。日本の官僚たちの無責任さというのはこういうことである。
- * 私は住基ネット（国民総背番号制）の凍結に向けて頑張っている。これの最大の問題は、国民の全ての情報が把握されるということ。管理は果たして万全なのか？ IT先進国はむしろ分散管理の方向に転換している。日本だけが一周遅れで、がむしゃらにやろうとしている。皆様も地元の政治家に問うてほしい「これでよいのか！」と。